平成30年度の活動記録（10月）

参加者数
対象者：２３名
協力員：１１名
社協運転手：１名

第13回（10月16日）◎屋外昼食会

掛川森林果樹公園に行ってきました

公園散策後みんな揃ってハイ・チーズ！

●掛川森林果樹公園は小鳥のさえずりや森の声に耳をかたむけながらゆったりと散策すれば、四季折々の花々や、たわわに実る果実をすぐ手元で鑑賞でき、香りまでも楽しむことが出来る公園でした。
●生き生きの皆さんもご自身の体力に合わせてのんびりと楽しんでいただけたと思います。
●お楽しみの昼食は、新東名の森パーキングエリアで各々好きなものを食していただきました。お味はいかがでしたか？
●そして最後に掛川道の駅で「ショッピング」も楽しんでもらいましたね。　面白くもチョッピリお疲れの１日でした。

台風で葉の落ちた「梅エリア」

↑オイオイ
出るのかよー

←↑ 森パーキングエリアでの
食事風景 「いただきまーす」

第14回（10月22日）　◎手話を楽しもう

手話合唱「ふるさと」が本当に上手になりました。

参加者数
対象者：２６名
協力員：１６名

●いよいよ11月11日（日）の相良区公民館まつりが近づいてきました。
●今日も手話合唱「ふるさと」の練習をしました。
●このところ生き生きクラブは手話の練習が続きますね。
　でも皆さん、ほんとに上手になってますよ！
　　公民館まつり、今から楽しみですね。

先ずは「すこやかエブリデイ」でウオームアップ

皆さん頑張りましたね

うさぎおいし
かの山・・

←会長も頑張っています

こぶなつりし
かの川・・

◎本日のおやつ

豆腐ナゲット

いきいき歳時記・十一月

勤労感謝の日（きんろうかんしゃのひ）

●新嘗祭（にいなめさい）

「しんじょうさい」とも呼びます。11 月 23 日（明治 5 年の改暦以前は 11 月の第 2 の卯の日）に「天皇が新穀を天神地祇に勧めて神を祀り、身ずからも食す」収穫祭・・・分かり易く言い直せば　その年に収穫した新穀（主に米）を天地の神に供え、農作物に感謝し、自らも食する儀式です。

●起源は民間行事

この行事、起源をたどれば大古の人々が、その年の収穫を祝い、感謝したお祭だったのでしょう。そして、古代に国家が統一されて、祭儀が天皇を中心とする宮中行事へ集約されたため、この新嘗祭も宮中の儀式のひとつになったようです。

飛鳥時代の皇極天皇以前から行われていました。平安末期には衰え中絶していましたが、江戸時代、東山天皇のときに復活しました。その当時は民間で広く行われていたようです。

●現代の 11 月 23 日は

さて、主権在民の現在では新嘗祭は「勤労感謝の日」と相成り、その意味は現在の祝日法によれば、「勤労をたっとび、生産を祝い、国民たがいに感謝しあう」となっています。

●感謝祭(Thanks giving)

太平洋を越えたアメリカ合衆国では、1620 年にマサチューセッツに上陸した清教徒が最初の秋の収穫を祝ったことに由来すると言う「サンクス・ギビング・デイ」という祝日があります。

現在は 11 月の第 4 木曜日とされているそうです。今年(2018 年)は、日本の勤労感謝の日の前日、11 月 22 日であります。

この時期、洋の東西を超えて、収穫に感謝ですね。

籾すりの新嘗祭を知らぬかな　正岡子規

「紅葉」と書いて「もみじ」と読むのは なぜ？

生き生きクラブ　会長　西尾仁男

紅葉の便りが後を絶たない時期になりました。　「紅葉」と書いて「もみじ」と読むのは少し無理があると思いませんか？　そこで、語源や由来について何かあるだろうと調べてみました。

『もみじ』という言葉は『草木の葉が赤、または黄色くなる』という意味の動詞「もみず」に由来し、葉の色が変わる紅葉そのものを指す『もみじ』という名詞へと変化したものだそうです。

では『もみず』の語源は何なのか？　有力な説は、染め物の『揉み出づ』のようです。　紅花染めには紅花の花びらを使いますが、この花びらには紅色と黄色の 2 種類の色素が含まれており、真水につけて揉むと、まず水溶性の黄色い色素を『揉み出す』ことができます。　次に、アルカリ性の灰汁に浸して揉むと、鮮やかな紅色を『揉み出せる』んだそうです。　紅花染めに由来するのであれば、『赤葉』という漢字ではなく『紅葉』になったのも分かる気がします。

「日本大歳時記」には、柿紅葉、白樺紅葉、雑木紅葉等、植物名を冠した言葉が載っており、「もみじ」が草木の種類に関わらず、赤や黄色に変わる草木をモミジと表現しているようです。

神宮外苑の「銀杏黄葉（もみじ）の並木道」・尾瀬の植物が鮮やかな「草紅葉」になる景色等は有名です。　多いに紅葉を楽しみ、季節のの移ろいを感じ、心豊かに過ごして頂けたらと思います。

相良でんでら史話 五

大澤寺十五代住職　今井一光

《 蕉園渉筆　その一 》

来年は牧之原市では田沼意次生誕300年記念ということで各イベントが催されます。拙寺も「ぶら田沼」（ぶらり田沼の旅）なる企画に協力させていただいております。

本堂の床下材の一部に相良城破却材が使用されている痕跡（ほぞ穴が開いた大型建造物の転用材）を確認する事ができますので是非覗きに来てください。

また講演会や書物の発行が予定されていますのでこの機会に地元相良の歴史について今一度触れて、できれば一段掘り下げて調べてみることをお勧めいたします。

さて、田沼意次の話題については皆さんも概ねご存知の事と思われますので私は田沼後の相良について記したいと思います。

その存在は三年余り（文政6年1823年～文政9年）と短い期間ではありましたが戦前の小学校教科書にとりあげられるなど相良の偉人として第一にあげたい人格者、当地の政（まつりごと）を執った代官の小島蕉園です。

昭和初期に生まれた相良在住の方ではその名は知れ渡っていたそうです。大江にある相良湊を見渡す蕉園の墓（お不動さんの南）には遠足として彼の命日1月19日にお参りに行き、また小学校の校庭には彼を讃える顕彰碑があったと聞きます。

ところが今となるとその人の名を知る人たちは稀となり小学校でもおそらくその地元の偉人を紹介する機会はなくなっているのではないでしょうか。

相良田沼藩が取り潰しになって城も破却、一橋領に組み込まれて送りこまれる代官らの政は民の心に寄り添うものではなく旧相良領民の心は荒み、不平不満は時として一揆騒乱として発現しました。

相良城が破却された天明8年（1788）から35年。天領という幕府直轄地を経て7人目の代官として入ったのが医者でもあった小島蕉園でした。

他所での善政を評価され着任後相良の人の心は平穏に戻っていったのです。

蕉園の住んだ波津代官屋敷は横町から少々百花通寄りに入ったあたりにありました。拙寺九代祐厳と十代祐賢は蕉園と懇意にしていただいたことから蕉園の記した書が残ります。

何より彼が相良から遠江について感じた事を記した「蕉園渉筆」という書物が相良に残っていますので、そちらから少しずつピックアップさせていただきます。

小島 蕉園（こじま しょうえん）は江戸時代後期の旗本。田安徳川家に仕え、同家領甲斐国田中陣屋代官を務めた後、江戸、川越で医業を営み、晩年一橋徳川家により遠江国波津陣屋代官に抜擢された。

『ウィキペディア（Wikipedia）』

皆様のご意見や思い出話をお待ちしております

これからの　いきいき予定

１１月１１日：相良区公民館まつり
１１月１９日：昔の遊びを楽しもう
１２月　３日：お正月の作品作り
１２月１７日：クリスマス会

相・福 いきいきだより
笑顔がいいねっ！！
2018年11月5日号
（通算第56号）
発行
相良・福岡 生き生きクラブ